

鸞師の名號觀に就て

千葉良導

別の仔細候はず、仔細なきを故實とする我が淨土宗の實踐要諦たる簡易直截の六字の稱名が「ことあけ」せざる我日本の國民性と投合し、法然上人の選擇本願念佛の立教開宗となり、二祖鎮西上人は「淨土宗は一向專修の南無阿彌陀佛の一乘なり」と、之れ聖德太子の所謂萬善同歸の一乘精神を繼承せる展開的な現はれと見るべきである。今その名號に就て鸞師が之れを觀て、如何に之れを取扱はれたかを考察して見たいと思ふ。

一

名號爲體 鸞師教學の代表的なものは何と云つても師の釋述せる「論註」即ち往生淨土論註上下二卷である。鸞師は本論たる世親の無量壽經優婆提舍願生偈——往生淨土論を註釋するに當つて、先づ其の原典たる淨土三經の根本精神を把握し深く其の玄旨に通曉し、以て本論を註解釋述されたものと思はれる。仍て普通一般の註釋書とは其の趣を異にし鸞師の獨創的な思想が多分に盛られてある。之れ後世雲洞が論註正義に鸞師の卓見として、十四項目を列舉せる所以であつて、此の「名號爲體」もその隨一である。鸞師の意、三經の所說廣多なりと雖も、其の所詮の宗要、佛の名號——彌陀佛名にありと爲し、佛名を以て經體とし、延いて論の體も同じく佛の名號にあることを示された。

釋迦牟尼佛、在王舍城及舍衛國、於大衆之中、說無量壽佛莊嚴功德、即以佛名號爲經體。

論註正義に之れを評して

此義たやすく曉らむべき事にあらず、善導に先立つこと百年、既に三經の主旨を悟り、明かに名號を以て經體と爲すと判せしこと、其の卓見に敬服すべきなり。善導たとひ聖僧の指授に由ると雖、も又曇鸞に負ふ所少しとせず。

その獨創的卓見を歎稱せること、實に尤もなことと思はれる。佛名經體に就て記主は「一體とは即ち是れ彼の佛の修生顯得の三身、萬德總別の功德、皆これ佛體なり、則ち此の體を以て名號に攝在す、今經の宗致この意を出でず」と。

又論註精華集には「宗の意、無盡法界他力實體の上に、恆沙功德化用の淨土を立つ、教主の三身圓滿四智所成の萬德皆悉く名號に攝在す、體もつて名を成し、名もつて體を顯はす、名體不離化用無窮なる故に經體となす」と。又更に經の意既に名號爲體だと雖も、論は何文を以て、佛名を宗體と爲すかに就ては

論に云く彼の如來の名を稱し、彼の如來の光明智相の如く、如實に修行相應せんと欲するが故なりとは、是れ壽光無量は名のもとの義たり、佛名は義の上の名と爲す。然かるに稱名の人、彼の名義の如く十八、十二、十三願に乘し、往生得易し、是れ論の宗體なり。但し此の義讚歎門の説相なれば、五念門中觀察爲正の手前、餘の四念が助となるか如しと雖も、元來讚歎には稱揚稱名の二途あり、且く隨他の機に約せば稱揚の邊を以て觀察の助となせとも、若し隨自に約する時は、稱名を正と爲し、五念皆助となるなり。是を以て宗家（善導）論の五念を引いて一行三昧の助と爲す、蓋しこれ經釋論符契する者なり。

と論及されて居る。

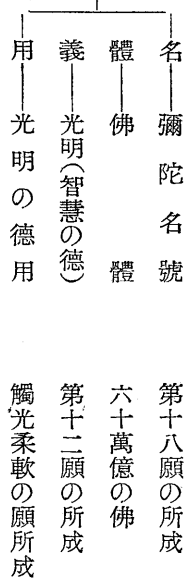
二

鸞師は名號を本質上價值の上より、之れを實相法とし、名體不離、方便法身として歸依の對象と見られた。

實相無漏の法 下々品逆者十念往生に就て、罪惡と十念名號との輕重校量に對して、在心、在緣、在決定の三義を立て、時間上の長短や量の多少を以て律すべきにあらず、業道經の重者先牽の道理は名號の上に在るのであつて、在心の義即ち本質上よりは、名號は之れ實相無漏の法であり、罪惡は虛妄顛倒の見到依止して生ぜし虛妄の法、一實一虛豈相ひ比するを得んやと論じ、在緣の義即ち環境の上りは、煩惱虛妄の果報の衆生に依つて生じたもの、十念は無上の信心に依止して、阿彌陀如來の方便、莊嚴眞實清淨無量功德の名號に依るものと述べて、名號を實相無漏の妙法と見立てられた。

名體不離 名號は彌陀果德の名、凡そ諸法は萬差なり、名の法に即するあり、名の法に異するあり、名の法に即するとは、諸佛菩薩の名號、般若波羅密陀羅尼の章句、禁咒の音辭等之れなり、仍て無碍光如來の名號は、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を滿たすと云ひて、名義具足、名體不離の義を明かにし、佛に實相爲物の德あることを知つて、三信を具し稱名せば、自づから法體に具はる佛德の義に契ふが故に、心光攝取の利益がある。之れを「如彼名義欲如實修行相應」と云ふのであると述べられた。之れを記主及び問師は、決疑鈔、頌義に於て名體不離名義具足は念佛に限る、名號を稱ふれば體（佛智の六十萬億の佛體）を呼ぶ事になる。此の呼招によつて其の自體（佛體）に赴く故に、佛體を呼ぶ時、自體に具する智德と相應す、之れを名義相應と云ふ。名義相應するが故に、自づから攝取不捨の利益ある事になる。さてこの名體義用の相互關係は不即不離であつて、六十萬億の佛體の上に備はる所の智慧の德を義と云ひ、此の義（光明の德の働き即ち德用（身意柔軟益）を用と云ふ。然かし此の體も義も用も共に皆名號によつて之れを顯はすのであるから不離と云はれるのであると述べて、更に其の意を明了にして居る。

四法不離



方便法身 諸佛菩薩に二種の法身あり、一には法性法身、二には方便法身なり、法性法身によりて方便法身を生じ方便法身によりて法性法身を出す、此の二身は異にして分つべからず、一にして同すべからずと云ひ。又法身無相なり、無相の故に能く相ならずと云ふことなし、是の故に相好莊嚴即ち法身なりとあり、而かも此の二法身は不一不異の關係にあるを以て、佛名號は方便法身と見られ得る。ここを以て論註精華集には「佛名號は即ち方便法身なり故に佛名號を實相法と云ふ」と述べて居る。又鸞師が眞實法身を知れば眞實の歸依を知ると云へる所から見ると、名號を歸依の對象にまで引揚げて居らるゝことも察し得られる。蓋し之れ佛の内證外用、一切の功德が名號の上に攝在し、萬善同歸であるからである。

三

徳用に就て云はゞ

能止一切惡 奢摩他を釋する下、現當に互つて述べられたが、現實に於ては「一心に専ら彌陀如來を念じ、彼の土に生ぜんと願せば、此の如來の名號及び彼の國土の名號、能く一切の惡を止む」と説き、而して此等は如來如實の功德より生ずとありて如實の徳を受用するからである。

得如實功德 稱佛名號によりて奢摩他を成し、如來如實の徳を受用するから「如來の功德如實の故に、修行者も亦如實の功德を得、如實の功德とは決定往生彼土也とある。そこで良榮見聞には、佛と行者と俱に眞實の義あり、佛境實なる故に、能行の人も亦往生如實の功德を得と述べて居る。

罪滅心淨 實生實滅の見に入はれ、二執に墮せる下品見生の人が、無生の淨土に往生し、無生を體得する所以に就て、明珠投水の譬を以て之れを釋して云く「阿彌陀如來、至極無生の清淨寶珠の名號、之れを濁心に投すれば、念々の中に罪滅し心淨くして、即ち往生を得」と、即ち如來無生清淨の名號によつて、見生の罪濁滅して淨化され行くことを述べられたのである。

體得無生 同じ譬の下に於て「又是れ摩尼珠を玄黃の幣を以て、包んで之れを水に投すれば、水即ち玄黃にしてもつばら物の色の如し彼の清淨佛土に、阿彌陀如來無上の寶珠あり、無量の莊嚴功德成就の帛を以て包んで、之れを往生する者の心水に、投するに豈生の見を轉じて無生の智と爲すこと能はざらんや、又氷の上に火を燃くに、火猛きときは則ち氷解く、氷解くときは火滅するが如し、彼の下品の人、法性無生を知らずと雖も、但だ佛名を稱する力を以て、往生の意を作して彼土に生ぜんと願すれば、彼の土は是れ無生の界なれば、見生の火自然に滅す」と、即ち宗祖の「阿彌陀佛に染むる心の色に出ば秋の梢のたぐひならまじ」の歌の意、全く此の理による。而して無量の莊嚴功德成就の帛とは、觀察門所對の境たる三種莊嚴(二十九種)の體相を帛に譬へられたのである。

得入大會衆 本論に入の五門を明す中、讚歎門の下に「阿彌陀佛を讚歎し、名義に隨順し、如來の名を稱し、如來の光明智相に依て修行するを以ての故に、大會衆の數に入ることを得、是れを入の第二門と名く」とあるを「如來の名

義に依て讚歎したてまつる是れ第二功德の相なり」と註釋された、即ち鎮西の所謂稱名に過たる讚歎はなしと云ふ讚歎門稱名義は之れに基りて居ると見られ得る。

速得無上菩提 何の因縁あつてか速得成就阿耨多羅三藐三菩提と言ふやの問の下に、五念門の行を修して、自利利他成就するを以ての故に、然かるにたしかに其の本を求るに、阿彌陀如來を増上緣と爲す。凡そ是れ彼の淨土に生ずると及び彼菩薩人天所起の諸行とは皆阿彌陀如來の本願力に緣るが故なり、若し佛力に非ずんば、四十八願すなはち是れ徒らに設くるならんと述べ、三願を引證し、先づ第一に第十八願を引いて、佛の願力に緣るが故に、十念の念佛を以て便ち往生を得、往生を得るが故に、三界輪轉の事を免る、輪轉なきが故に速かなることを得、一の證なり、次に入正聚の願を引て、正定聚に住するが故に必至滅度して、諸の廻伏の難なし、所以に速かなることを得、二の證なり、三に一生存補處の願を引て、常倫諸地の行を超出するを以て、速かなることを得、三の證なり。そして速かに菩提を得るとは、是れ早作佛を得るなりと釋されてある。

四

五念門の骨子 以上所述の如く、稱佛名を以て經ならびに本論所詮の體とし、その内容價值及び徳用にわたつて鸞師の釋述する所、相當詳細である。經及び論所詮の體(中核、骨子)が稱佛名にありとせば、其の實踐的行法に於ても稱佛名が其の體となり、骨子たらねばならぬと思はれる。然かるに論註に於ては五念の行法を並べ揚げられてある。

勿論之れ本論の所述を追ふて釋述されてる點にもよるべきであるが、今論註二卷の内意を窺ふ時、表面論の所述に順じて五念門を並べ揚ぐと雖も、やはり稱佛名が五念門の體となり骨子となるかのように見受けられる。即ち作願門の

下には、佛名を稱する事によつて能く一切の惡を止むと云ひ、讚歎門は稱彼如來、如彼如來光、明智相、名義相應を以て之れを述べ、稱念の義を以て釋せること既述の如く、又禮拜の實踐、稱佛名を離れず、觀察の體相たる無量莊嚴の功德相は、名義相應、名體不離なれば稱佛名の受用功德に外ならず、回向門また稱佛願生によりて罪滅心淨して、大悲を起し一切苦惱の衆生を捨てず、共に願生を期する事となる。斯く鸞師の所述を見るに稱佛名が五念門と深き關係を有し且つ其の行成就の素因となれる所より察するに、所謂「讚歎爲正の五念門の義」は既に内面的に存在し、稱佛名が經論所詮の體たるのみならず、其實踐上、隱然五念門の骨子——中核——として取扱はれて居る事が察し得られる。但し之れ予の愚案なり諸賢の提撕を乞ふ。

